

◀ 寄 書 ▶

BANGKOK より 帰 り て

正 員 工 学 博 士 最 上 武 雄*

1. 1955年6月18日から同8月17日までタイ国バンコック¹⁾にある ECAFE²⁾ の事務所で Low Cost Road and Soil Stabilization という報告書を作製した。

報告書そのものは、予想に反し各国からの回答がほとんどなかつたのと、ページ数の制限がきびしかつたので、考えていた程度のことができなかったのは残念であつた。

2. ECAFE そのものについては出発前ほとんど知識がなく、滞在中の見聞によつて多少知ることができたが、誰でもいうとおり、日本の国際的関心はもつと大幅に増大すべきであるということを感じた。筆者が ECAFE とは何であるかを知らなかつた等はその一例である。ECAFE はその名の示すとおり、アジア及び極東の経済開発に関する国連の一機関であつて、最初は上海にあつたのだが、支那の動乱以来バンコックに場所を移し、事務を行つている。国連機関であるから、ニューヨークにある国連本部からの指令で動いているが、一方ときどき開かれる種々の会議の決議にもとづいて調査研究を行うのである。事務局には Staff member が何十人かいて、調査研究、会議の準備等を行つているのだが、ときに特殊の題目について臨時に人を呼んで報告を書かせることがある。今度の筆者の場合も一例で Short term consultant という役名である。Low Cost Road and Stabilization の調査研究も前2回ほどの会議の結果、要請されていたものである。

他の国際機関と同様に、各国に対して強制力を持つものではなく、助言 (Recommendation) をするのみである。念のためにつけ加えると、この助言も会議を通じて行うのであつて、ECAFE 事務局 (ECAFE Secretariat) が行うのではない。

従つて、各国から会議に出席する代表は大きな権限と責任があるので、それぞれの国の立場を十分に説明し、力説すべきである。この発言によつて ECAFE

事務局は動かされ、仕事をするものだからである。

3. ECAFE 事務局での生活 筆者は正確に2ヶ月間事務局に通つたが、朝7時25分頃自動車が地域別に Staff members 等を連れにくる。この Transportation fee は月当り65バーツであつた³⁾。だから送迎の車は無料ではない。7時30分から、仕事を始め、12時から1時まで食事時間、1時から4時まで仕事をする。行つた初めの頃は夏のため3時30分までだつたが、7月1日から4時までになつた。

勤務時間は7時間半できつちりやる。その代り勤務時間後は全く自由であり、土、日は休みである。

職員の国籍は種々雑多で、米、仏、和蘭、ソ連、印度、アフガニスタン、ノールウェー、パキスタン、ビルマ、タイ、支那、日本、インドネシア等々であるが、用語は主として英語であり、ときに便宜的に仏語その他が用いられることがある。皆英語は達者なものだが、平均して日本人の語学は下手である。語学に関しては、報告を書くと、誰が書いても Language Section と言うのに廻り、言葉づかいその他が直されたり、疑問の印がついて返され、万全を期しているのはうまくできていると思つた。事務局内にコーヒー、ココロ等の売店があり、疲れると友人を語らつて油が売れるようになっていた。8月半ばから、カフェテリアができ、昼食もとれるようになった。事務所では人種差別撤廃を旗印としている。

Staff members は Economic officer, Finance officer 等といわれる。Transport Division というのに筆者はいたが、筆者も Economic officer であつた。Staff member の俸給は Director category, Professional category に分かれており、略して D₁, D₂; P₁, P₂, … P₅ になつている。これは日本の俸給率の級に当る。D₁, D₂ はごく少数しかなく高級職員である。P-category が大部分で P₅ は Division Chief 級であり、P₃ くらいが比較的多いではなからうか。P₁ くらいだと Bangkok で ECAFE の Staff member としての生活としてはやや苦しいと思われる。日本の号に当るのが step である。1年に one step づつ上る。おのおのの grade には平均10くらいの steps がある。step の進みは年によつて自動的に行くが grade の上りは higher grade の職員の認定による。従つて初めにどの grade になるかはなかなか重要である。これはまづ席が空いているかどうかであるが、各国政府の

* 東京大学教授、工学部土木工学教室

1) Bangkok は外人の呼称で、タイ名は Krung Thep.

2) Economic Commission for Asia and Far East (国際連合アジア極東経済委員会)

3) Bahts はタイ人の呼称で外人は Tickals ともいう。この下の単位は Satang で 100 Satangs が 1 Bahts である。現在 1 Bahts = 17 円くらいかと思う。

推薦条件にもよるらしい。従つてこれから行かれる方は、この点留意される方がよいと考える。

なお1年とか2年とかの契約で行く人については赴任手当に当る *installation allowance* とか、子供の教育手当である *education allowance*、2年に一度の *home leave*、家族を呼ぶときの規定等の細かい規則がある。*short term* のものは *no allowance* である。

筆者のような臨時傭いは初めから題目がきまつているものの、このような風を書いて欲しいというような注文はごく大雑把に打合されるだけで、後は大体のページ数の指示を受けるのみであつた。ページ数などは Bangkok に行つてから話されたので一寸まごついた。臨時でない人は定常的な事務局の仕事をする。月1回(と思う)の *Senior staff members* の会議、週1回行われる会議の決定にもつて事務局は運営されている。大体前にも述べたとおり、ある題目が各国から *delegates* が集つて定めた決定にもつて定められると、それについて各国政府に照会し、その返事により、また手持ちの資料によつて次の会議に対する報告を作る。その際、多くの場合 *investigation trip* というのを行うのが普通である。

筆者の場合と同様に、各国からの資料は集めにくいことが多いので、手持資料で行うことが多いのである。着任すると、期限つきで何かの議事録または報告書を読み *Comment* を書くといつたことで仕事に馴れてゆかせるらしい。従つて英文を速く読み、速く書くことは必要である。聞くこと、話すことはもちろんであるが、それよりも外国人の間にあつて気楽につきあえる気持ちの方が重要なように思う。

ECAFE に限らず国際機関にどしどし人が出て行くことがある意味で重要なことだと思つたので、余計なことまで書いたのである。重ねて云いたいことは、各国の代表が集つて行く会議ははなはだ大切で、*delegate* の適切な発言は特に大切だと云うことである。現在(9月)タイにある国際機関にいる日本人の数は ECAFE 5, FAO 1, UNESCO 1(?)である。ECAFE というと農林省 1, 通産省 3, 輸出入銀行 1 である。建設省、国鉄でも少なくとも 1 人くらいづつは出したいような気がした。何といつても外国で外国人の間で仕事をするよりは内地にいるよりもつらいのだから、日本から人を送る場合にもできるだけ暑い気持で出すということが必要である。また帰つて来たときにも温く迎える態度が一番大切であらう。

4. Bangkok の町 現在のタイの領土には古くは

4) Menam は川, Chao は Prince of north の意、従つて日本でメナム川と云うのは誤りである。

Lawa とかその他の野蕃な人間が住んでいた。また Menam Chao Phya⁴⁾ の谷にはインドの移住民がい彼等が仏教を持ち込んだとともに文明をももたらした。古代都市 Lopburi (Bangkok 北方 154 km), 古代 Ayuthia (Bangkok 北方 87 km), Rajaburi, Chandaburi 等を築いたのも彼等と言われる。Siamese に Thai と呼ばれていた一民族は西紀前より揚子江上流の谷を支配していたが、南支那方面にも住んでいた。彼等は南方に移つていつたが、13世紀末までは独立していなかつた。ところが13世紀末大いに振い、原住民を追つぱらつて Chiangmai の町を作り、Menam Chao Phya の谷, Malay 半島の若干を含めた Sukhadai 王朝ができた。このようにして次第に Siam 王国が築かれてゆき Rama I (1782-1809) によつて現王朝の基礎ができた。そして彼が都を Menam Chao Phya の東側, Bangkok の現位置に定めたのである。以後 Rama II, Rama III, Rama IV と続き, Siam の近代化に大いにつとめた Rama V (1868~1910) が現われた。彼は名を Phra Chula Chom Klao, またの名 Chulalongkorn というが、1868年は明治元年であり、1910年が明治43年に当るのも奇しき因縁と言うべきで、日本の近代化が大いに進んだ明治時代と偶然ながらよく一致している。従つて、Chulalongkorn の名は国民によく記憶され、Chulalongkorn 大学はタイの *leading university* である。Bangkok の町は以上のような歴史的背景を持つている。古くは城郭をめぐらしたもので、いまでも当時の望楼、城壁の一部が残っている。これらが古い町で、王宮のある地域である。町は次第に東の方に伸びてゆき、当時の New Road ができ、また 20 年位前からの Bangkoki 住宅地が発展した。New Road に近い Lumpini 公園のごときは 40 年前には一面の森林で鹿狩りができたという。日本大使館の現位置は Lumpini 公園のごく近くの Saldeng Road にある。ECAFE の事務局は旧城内に当る部分にあり、町の西方に当る。王様の散歩道という意味を持つ Rajadamnoen Avenue にある。

案内記にもあるように旅行者にとつての Bangkok の町の第一印象は美しいバゴグを持つた寺院で初まる。寺院の総面積は町の総面積の 1/5 に当ると言われるほど寺院は多く、また一つ一つが大きい。寺は国費で営まれており、寺に属する黄衣をまとつた僧侶達は町の点景として美しく、町の人達にも尊敬されている。朝5時半頃から初まる托鉢の際には、はだして鉢を持つた黄衣の僧に米、金等を献し、ひざまづいておがんでいる姿があちこちで見られ、バスに僧が乗つて来ると席を譲る。

寺院の中で一番有名なのは Rama I によつて作られた Wat Phra Keo (Emerald Buddha) である。しかし、最も美しいと筆者も思い、他も言つていたのは Marble Temple と呼ばれている寺院である。

町の印象を一言にして言えば、大体支那風である。事実、支那人の数は相当であり、東京の銀座に当る Jawara Road の商店のすべては支那人の経営するところである。

Thai の総面積は日本の総面積の約 1.25 倍であるが、耕作面積の 14% に過ぎぬ日本とは異なり、広大な耕作面積を有する上に太陽に恵れているので米の産額は非常に多い（人口で言うとタイは日本の約 1/5、タイの農耕人口は 85%）。そのためかどうか、町には飲食店の数は非常に多い。場所によると軒並みでしかも露店がずらりと並んでいる。日用品のほとんど全部を輸入に仰ぎ、米、チーク材を輸出している。

特に大切な米は Menam Chao Phya の流域であり、チーク材も同河上流方面に産するので、同河は物資運搬に特に大切である。外国からの船は市の東方にある Bangkok harbour に泊する。町での交通は路面電車、バス、サムロール（日本の輪タク）⁵⁾、タクシー等による。路面電車は単線だがなかなか悠々たる趣きがあり、筆者は大いに愛好した。車の前方が上等、後方が下等に分かれているが、特別に仕切りはなく、上等、下等の差は座蒲団のある無しである。終点に來ると座蒲団の位置を前方に移動し、いままで下等であつたところが上等となる。単線だからところどころで停車して、向うから來る車を待つている。その間運転手、車掌は下でしゃがんだり、ときにココ cola 等を飲んで英気を養つている。バスは古いものはトラックを改造したようなもので椅子も木で立派ではないが、新しい日産バスは天井も二重、椅子も日本のバスのものと同じで快適である。バスも筆者は愛用した。サムロールは Bangkok の一特長とも言えるほどたくさんあり、自転車の代りにオートバイのついた俗称モーターサムロールまたはバタバタと言うものもある。夕方涼しい日、サムロールに Avec で乗つている光景などはなかなかよかつた。ピブン首相が世界旅行から帰つて來た日に何十台と云うモーターサムロールが何のためか知らないが、行列をなして通つたなどは一奇観であつた。Bangkok 市内にはたくさん運河があり⁶⁾、

小舟に野菜果実を積んで売りにきて、その船着き場付近では市がたつて賑わつている。

町の人は一寸気のきいた人は自家用車を持つているようである。従つて映画館の前などで parking している車はかなり多く、また交通事故は相当多い。筆者が行つて間もなく日本商社の奥さんの車が並木にぶつかつて即死し、帰つて來る直前アメリカ大使と令息 2 人がトラックとの衝突で死亡した。電気冷蔵庫のごときも生活必需品であり、扇風機は日本製品がかなり使われている。

支那と同様、金を蓄えるよりは物を持つ風習があるため、太い金の首飾り、指輪、腕輪をした人を多く見かける。自家用車を買うのもこの心理であろう。

民家は木造が多いが、チーク材を使うため材料は立派なもので机、椅子等の家具類も素晴らしいものが多い。官庁等は煉瓦積みが多いようである。民家は地下水位が高いのと洪水にそなえて床を上げ、階段をつけたものが多く、靴をぬいで上る。板の間である。ベッドでねる家もあるし、床にふとんを敷いて寝る家もあるようであつた。

上流家庭の人々は欧州で教育を受けた人が多く、筆者と同室だつた Chao Kavila のごときも、Chulalongkorn 帝の配慮で幼時より 11 年ほどフランスにおり、英国に 4 年とか 5 年とかいて、英国の学校を出たとか言うことだつた。従つて、語学は非常に達者なものだつたし、中学の教科書以来耳にしたことのないような Don't mention it. とか Thank you very much, indeed. だとか I shall send it over to you. なんてのはしばしば聞いた。more or less と云う言葉を almost の意味につかうのも初めて覚えた。

しかし、次第に Chulalongkorn 大学の卒業生等が勢力を得つたように思われた。この大学の若い卒業生でも日本の大学卒業生よりは一般に英語をよく話すと思つた。もつとも相当お国なまりで open をオープンなんて言うし、書かせると決してうまいとも思わないが、一応用の足りる程度には喋つた。年をとつた人は外国人と接する機会が多いせいかもつとうまいようである。

5. Bangkok の地盤 Bangkok を含む一帯の地域は Menam Chao Phya による沖積層である。非常に平坦で、例えば Bangkok と河口の Paknam⁷⁾ とは道路沿いで 25 km であるが、この間水平差は約 1 m とのことである。このような地形から判断して、一応地層は複雑ではあるまいと想像される。Bangkok における現在ただ一つの Menam Chao Phya に渡した橋である Memorial bridge の東岸でのボーリング結果

- 5) 聞くともサムロンと聞えるが I である。ピブン首相のピブンも最後は I である。
- 6) クルンと云う。クルークの意か。
- 7) Pak は口、nam は水の意、Paknam は住時 Bangkok の主要な海港であつたが、¹現在は一漁村である。

によれば、-22 m までは粘土、そのあたりに薄い砂層があり、その下は粘土、その下は yellow sand、-28 m 以下不明と言うことになっている。これよりやや下流の表面及び 2 m くらい下までの粘土を見たが、blue clay とでもいうもので相当微粒で乾燥強度大で cohesive であつた。建設中のベニヤ板工場の現場で聞いたところによると長さ 4 m、辺長 20 cm の三角形断面の鉄筋コンクリート杭を打つていたが、安全率 2.5 として 1 本当り 1.20 t 持たせるというから、粘着力 1.2 t/m^2 としている。また一方圧縮試験で粘着力 8.2 t/m^2 を出したと言つていたが、両方の値が違いすぎる。杭打ちの様様を見ていたが、初め 10 m くらいはすつと入つてしまう (16 m 木杭)。見たところかなり cohesive と思われ 8.2 t/m^2 の方に賛成したくなる。sensitivity のことを聞いたが、この言葉をよくは知らぬらしかつたので説明し、5 くらいかと言つたら、そうだと答えたが一寸疑わしいと思う。

粒子の大きさ等から考えて sensitive であることは確かではないかと思う。また他の工事現場の資料から考えても決して cohesion は小さいとは思えない。

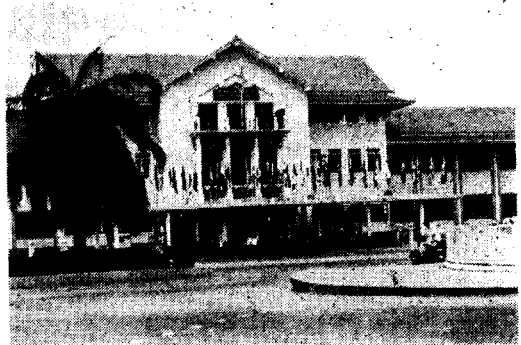
筆者の見た基礎工事については相当土質力学的に検討の余地があるように思われた。

6. 日本の技術が入りうる余地はタイだけでもかなりありそうに思われ、タイ以外も実際見たのではないけれども同様であろうと言うことは想像される。しかし、それだからといってただちに入りうるというわけではない。また技術情報の交換のごときも重要とは思いますが、日本の現状についても反省すべき点が少ないようである。外国から帰つた人が異口同音に言うように、いかに立派な報告でも日本語で書かれている場合には外国人に読めないと言うことが決定的な難点である。日本の雑誌も内容を説明すると、これはよいものだと言うが、さもないと全然理解できない。

また日本の技術者は外国人と接する訓練をする必要がありそうだ。一つは言葉であり、一つは馴れることであろう。国際会議、学術的なものでも政治的のものでも、それに対する認識をもつと深めるべきではなからうか。大使館から係官が出てただ聞いているとか、大した準備なしで代表者が出席しても結果はそれほど期待できない。代表に出された人も気毒である。

一方業者関係でも、学術関係でも、日本の実情をもつと知らせる努力を払うべきではなからうか。それには一方的でなく相手の実情をもつかむべきである。いろいろまだ書けばあるけれども、ひとまづさしあたつての報告をした次第である。

写真—1 ECAFE 正門



写真—2 Rajadomnoen Avenue (手前は日産バス)



写真—4 Emerald Buddha



写真—4 ベニヤ板工場基礎工事場

